

ぴっと・いん



★「丹波のさる酒」新発売

丹波の清酒「小鼓」の醸造元である、西山酒造場から、さるのこしかけのエキスを含んだ「丹波のさる酒」が発売された。



OLD PAR に似た容器

丹波路はきのこ類が沢山自生する数少ない自然境で、昔から難病によく効くと評判の高い、さるのこしかけも沢山とれる。

その中でも、昔から健康に良いと貴重品扱いにされている、靈芝（れいし）から抽出したエキスを蜂蜜、梅の実などで造った珍しいお酒。

口あたりもよく、来年がサ

ル年ということもあって評判は上々のようだ。丹波焼の徳利に入って五〇〇mlが一〇〇〇円。角びん入六〇〇mlが九〇〇円。

★穴場ライムライト

三宮の新聞会館のところに国道2号線沿いに東へ3分ぐらい行ったところに、サンサイドホテルがある。そのホテルの6階に、ライムライトというレストランがある。チャップリンと関係があるのかどうかは知らないが、落着いた雰囲気、肩のこらない店だ。



静かな雰囲気を楽しめる

夜はチキンクリーム煮 950円、海老・貝柱・あわびの串焼 1000円、ビーフストロガノフ（ビラフ添）1800円、牛ヒレ肉ステーキ 3000円などが好評で、シェフの推奨メニューである。

★JBAが全国縦断

生田神社に参拝

（社）日本バーテング協会では11月15日に東京で開催



参拝する神戸支部のメンバー

される創立50周年記念全国大会を前に、9月1日から全国縦断キャンペーンを繰り広げている。この企画は飲酒運転撲滅、愛の献血運動、あゆみの箱運動をテーマに全国のJBA各支部を一台のレンタカーでリレーしているもので、去る9月28日に神戸を通過。神戸支部△神崎夫支部長Vでは、生田神社で祈願して、大阪支部に車を引き継いだ。

●神戸うまいもとドリンキング

メンバーズルーム
モンテカルロ

生田区中山手通1 ニュー友藤ビル1F 電話391・0081

会員制のクラブ・モンテカルロが開店一周年を迎え、会員への日頃の感謝の意味を込めて、去る9月11日～14日の四日間記念パーティを開いた。



盛り上がるパーティ

会員同士の親睦も兼ねたこのパーティ、同店専属の歌手、太田亜生さんとオルガンの坂本八重子さんの演奏を楽しんだのひととき。連日時の経つのも忘れて、延べ約三百人が楽しんだ。

△姉妹店V

グランプリ/生田区中山手通1
ニュー友藤ビル2F 電話391・4406

シャングリラ/生田区中山手通1 マーニビル1F 電話391・8941



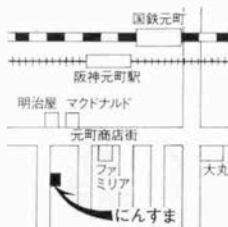
天井の店

にんすま (商標登録出願No.54-024854)とは……..
 にんにくを純和風おすましにしたもので、食品分析の結果ビ
 タミンB₂等も豊富に含まれております。
 臭いも少なく、かつお風味で召し上っていただけます。
 体内に非常に吸収しやすい状態で摂取出来、滋養・強壮・健康
 に当店自慢のお吸いものを是非一度ご賞味下さい。

■天井350円 ■にんすま100円 ■にんすま
 にゅうめん 450円



にんすま



神戸市生田区元町2丁目87-3 ☎392-3117
 営業時間 AM11:00~PM 7:00(年中無休)

Hat dog



なんすい
軟水のCoffee
味、また格別。

営業時間 午前10時~翌午前2時



コーヒーハウス
ハットドッグ

バス停《中山手1丁目》南側角
 ☎(078)321-1689



豪華さとおくつろぎと本物の味

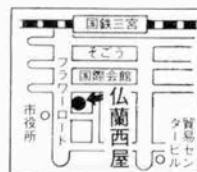
ハイセンスな神戸っ子の憩いのオアシス 気品ある雰囲気のなかでおくつろぎください



喫茶館

英国屋

神戸国際会館浜側
TEL 251-4562



喫茶館

仏蘭西屋

フラワーロード (市役所前)
TEL 232-4643

神戸百店会
だより



★20周年を記念して「西川」
「20年は短い。あつという間に過ぎた感じがします。これからもクラシックな内に現代のフーリングを持った、品位のある紳士



「今後もよろしく」と、西川社長

服づくりに頑張りたい」とトアロードに本店を持つ西川洋服店の西川幸利社長。
9月27・28日の両日ロイヤルホテル葛の間に20周年記念「秋冬新着展示会」を開き、日頃お世話になっているお客様に感謝の気持ちがいっぱい溢れた展示会を開いた。人情に厚く、そのくせ現代人気質を持つ西川社長の人柄が反映

した、隅々まで心遣いがいき届いた会場には、さすが神戸の紳士服と納得させる心意気がみなぎっていた。
★翻さずにはおれないベニヤ秋冬コレクション

9月26日、国際会館で開かれたベニヤの秋冬物コレクションは、デイオールのブレタから48点。今期のデイオールのパットを入れた肩やベルトで強調したウエストなど、パリ・コレクションの主流に添っている。その中でもろざん樹のプリントやラメ、タータンチェックなどにデイオールらしい品格ある優雅さと個性が見られた。



ろざん樹プリントのドレス

午後3回開かれたショウはどれも満員で、デイオールをはじめとするクラシック・パリのへの関心が伺えた。ショウに使った作品はベニヤ本店で取り扱っている。
ベニヤ本店 番332-2135
★タサキ新作コレクション
25周年の結晶が……

恒例の田崎真珠「9タサキ新作コレクション」が9月18日・20日オリエンタルホテルにて開かれた。今年で創立25周年、「シンフォ



いつの世も女は宝石に弱いもの

ニー」をテーマに繰り広げられたジュエリーの数々に田崎真珠の歴史と今後への意欲がみなぎっていた。今春のコレクションの折には渡米中だったメリー重富さんの新作も今回は登場。いつもながら素晴らしいデザイン、メリーさんだが、アメリカで学んだ新しい感覚が加わって今回は一段と斬新で、なかでもトルマリニングが圧巻だった。田崎真珠の今後の活躍が楽しみだ

● ショップトビックス

★待ちに待った元町のファッションビル「バルパローレ」が11月2日オープン。地下1階（紳士・婦人用品、靴、服飾雑貨、喫茶）オックスフォード、ホットマン、ミハマ、バル・エセル、サンパード、アド、ROROの店、TOM BOY、ジョルジュ・レッシュ、観音屋理珠店、1階（紳士・婦人服、服飾雑貨）、マサヤ・エルモア、マサヤ・カミノ、クリスチャン・デオール、クロム、ルシタ・オジャール、ココ山崎、ルシタ・クライカ、2階（婦人服、服飾雑貨）バーバリー、マサヤ、ピアジェ、ラブ、松伊、ベア、クレサール、青峰、壁の穴、コスモ、相生。よろしくお願ひいたします。

★松茸の季節です。天ぷら、おすし・ふぐの榮寿で土曜を。★国鉄元町駅南側からメリケン波止場へかけて美しい町並みと作られた「メリケンロード」をつくる会（三野通夫会長）から神戸市ハフアミア本社のある三菱信託銀行前に



チビッ子による除幕式

9月14日除幕式が、チビッ子による除幕式が行なわれた。高き百センチの足を投げ出したユニークなス

・アメリカ領事から約百人に見守られて行なわれた。高き百センチの足を投げ出したユニークなス・チビは町の人気者になるだろう★ファッションパークでは、11月5日・12日までスキー・フェスティバルを開催。①「スキーの家」志賀高原丸池ハイランドホテルで優待（室入10帖）を泊一泊二泊。1月10日・13日、スキー・フェスティバル。②「スキーの家」志賀高原丸池ハイランドホテルで優待（室入10帖）を泊一泊二泊。4日優待。その他スキー・晩會上映。スキー・プレゼントもありま

ポケットジャーナル



★全国初の能楽センターが大倉山にオープン
神戸能楽会入理事長 上田照也師は能楽センターを10月3日より、オープンさせた。



能楽センター全景

当日、午前10時より、神戸文化ホールの大食堂で、関係者約100名の出席のもとに、開所式が行なわれた。

上田理事長のあいさつのあと、坂井兵庫県知事、宮崎神戸市長、光田神戸新聞社長、衆議院議員石井一氏の祝辞があった。

当センターは、能・狂言専門のプレイガイド、お稽古の紹介、催会の案内、書籍・諸道具・記念品等の斡旋の業務を軸にし、同セン

ターの稽古場(18帖大の板間)での、各種のお稽古も組まれている。

神戸市田区楠町3丁目26
ル2F 電話15832

★神戸の顔見世師走興行
カナディアン歌舞伎

「今年は、"勧進帳"に取り組んでいるの。大ものでしょう。だから生命がけですわ。応援して下さいね」とカナディアン歌舞伎(国際学校カナディアン・アカデミーの10ヶ国生徒による)の育ての親、海野光子先生は、12月1日(土)午後6時は、2日昼1時30分と2回公演を神戸文化大ホールで開く



升慶 サミィ・ラフセン 富樫 ブレイド・クロフォード

高校生の外人歌舞伎だが、今年は、歌舞伎十八番"勧進帳"「一場」と三遊亭円朝口演"人情断文七元結"

△四場に体当たり。歌舞伎を通じて日本人を知るためのこのチャレンジも、神戸名物になり、神戸の顔見世興行の感さえる。

(S¥3000 A¥2500 B¥2000 C¥1000 D¥500 プレイガイドにて発売中)

★第1回神戸史学賞決まる

神戸史学会(代表落合重信)は刊行100号を記念して神戸史学会賞を設定した。

第1回は八木哲浩(神戸大学教授)、田岡香逸(石造美術研究家)の両者に決定し、10月20日に県中央労働センターにおいて、授賞式が行なわれた。

この賞は個人を対象に、兵庫県における歴史研究に業績のあったものとし、賞金10万円が贈られる。



八木哲浩氏

田岡香逸氏

八木哲浩氏は戦後30年に亘り、県下の近世史を調査し、すぐれた実証性と理論構成をもつ研究発表がその対象となった。

田岡香逸氏は、戦前から50年にわたって、地域史の調査研究を続け、特に石造美術史の分野において、その成果が著しい。

誕生日
ありがとう
運動



こんな「お誕生会」はいかが
幼児や小学生のお子さんのいらっしゃる家庭では、「お誕生会」をされると思います。先日、本運動にいただいた手紙をこて紹介いたします。各家庭でのお誕生会のご参考にしていただければ幸いです。

「先日、娘の誕生会をささやながら、幼稚園の友達六人ほど呼んでいました。ジュースとお菓子くらいのもてなしというほどでもないものに、みんなおもしろいといってくれて、紙芝居をしたり公園で遊んだり、絵の寄せ書きをしてくれたり等々で、割合落んで帰ってきました。

それに、私どもの方では、友達にきてもらったお礼といって、親がおみやげと称し何か品物を渡すという悪い(?)習慣があります。これをうちではやめて、おみやげ代一人あたま二百円として「誕生日あたり運動に寄付しました」と。みなさんそれでいいわね」と子ども達の納得のいくように説明してくれ、気持ちよく「うん」といって帰りました。

わすれがかりですが、小さい子ども達の気持ちをお送りします。それからごめんですが、子ども達のために、小さな紙切れに受取りを書いて郵送してください。もちろん、本運動では、かわいいうちのカードがありますから各人宛のカードを送りました」(九・二七番 兵庫区 主婦)

神戸市東灘区御幸通八丁一六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電話二五一八六一(内線三六

★摩耶山天上寺に

見事な摩耶夫人像

51年1月に焼失した摩耶山天上寺(伊藤浄盛貫主)に奉納される摩耶夫人像の入仏開眼法会が去る9月22日、

まやケブル下駅横の仮設仏母堂で行なわれた。この像は、関西在住のインド人が募金を集めて寄贈したもので、インドの彫刻家R・R・ジャイミニさんが一年半をかけて制作した高さ約180cm、重さ約250kgの大理石像。



インドから贈られた
摩耶夫人像

開眼法会にはP・C・ラル・インド航空会長、M・L・トリヴェディ・インド総領事、彫刻家のジャイミニさんら関西在住のインド人や摩耶山天上寺を復興する会理事長の楠崎四郎さんら約七百人が参列した。

★同人誌の展示即売もある
文学フェスティバル

関西における小部数出版物流通センターを目指している「神戸ブックセンター」(松村信人代表)が、「文学フェスティバル―80年―」

を、11月18日(日)午後1時から5時まで神戸学生青年センター(電話851-2760)で開く。

これには①文芸綜合誌・詩誌・タウン誌・詩集などの展示即売会②文芸評論家月村敏行氏講演「80年代・文学のあり方」③ティーチイン「同人誌のあり方」が予定されている。

連絡先/電話511-7677
★美術を志す女性性は奮ってご参加を

神戸二紀の第1回公募女流新人展が開催されることになった。絵画・彫刻で未発表の創作なれば誰でも出品できるというもので「余暇を利用して絵を描いている婦人が多くなり、そんな方々にお絵描きから芸術の世界へと一歩進めていただきたいのと、新しい美意識を持った方が参加されることにより二紀会のメンバーも共に勉強して行きたい」という主旨で今回の開催となった。

・会期/11月26日・12月2日
・会場/生田神社新館
・入選作品は優秀と認められたものには賞が授与されます。詳しくはT855神戸市垂水区西舞子6丁目1の80伊藤 740-1まで

★「愛の絵はがき」と「友情の絵はがき」
社会福祉法人「日本肢体

不自由児協会」より、昭和55年「愛の絵はがき」(2枚1組、山桜/宇田萩郵画、鯉/梶 喜一画、大人向け)と「友情の絵はがき」(3枚1組、ブルートレイン「あさかぜ」プリムラポリアンサ(花)ジャイアントパンダ、子供向け)を發行。どちらも1組60円で、県庁南庁舎1階の財団法人「兵庫県肢体不自由児協会」にて発売中。



パンダの絵はがきもある

また、11月10日・12月10日まで「手足の不自由な子どもを育てる運動」が行なわれ、11月9日(金)12時半より明石市市民会館(大)で「鬼太鼓座」の公演が同協会主催で開催される。入場料千円。

★お問合せは協会事務局まで。☎371-2420

★ラジオ関西に

ユニークな新番組誕生
ラジオ関西の番組に10月から新番組が多彩に登場。
朝のワイド番組V

美術
ガイド



★県立近代美術館 前田寛治展	11/17/12/16
★白鶴美術館 古代中国の青銅器展	11/17/12/16
★西宮市大谷記念美術館 岡本太郎展	10/21/11/18
★ギャラリ―さんちか 日洋展	11/1/11/6
神戸市勤労者作品展	11/15/11/20
神戸二紀女流作品展	11/22/11/27
★KCCギャラリ― 三筆社書展	11/2/11/8
紅玄会小品展	11/9/11/15
神戸外大美術部O 展	11/16/11/22
★KCCアートギャラリ― 松井香瑛日本画展	11/3/11/16
赤木蘇夫二洋画展	11/18/11/28
★ギャラリ―あじさい 線脚会千草人形展	11/6/11/11
日本画連盟小品展	11/13/11/18
上田民子個展	11/20/11/25
宮脇成之個展	11/27/12/2
★シティ・ギャラリ― 元永正正版画展	11/19/12/1
★キタノ・サカス 淑子・スーシオン展	11/3/11/17
町原親生写真展	11/19/11/24
★青屋ギャラリ―りべるて ガストナー石版画展	11/10/11/19
★大丸神戸店美術館 石阪春生新作展	11/8/11/13
アール・スーポールランブとステンドグラス展	11/22/11/27
★そごう神戸店美術館 山田尚時油絵新作展	11/29/12/4
唐津小次郎金西岡小十郎展	11/4/11/14
榎倉春樹書展	11/16/11/21
	11/23/11/27

★7時15分です 今朝もさわやか
月金 7:15 8:00
★おはよう神戸から 三浦ひろあき
です



右はゲストの佐藤陽子さん

月金 8:00 10:00 出演
三浦ひろあき
★スタジオTODAY ホットに語
ろう
月金 10:02 11:10 出演
西條遊児、西條笑児
★ナタイ明け番組
★CRミュージックスベイス558
月金 6:10 8:00
月金 6:10 8:00
D.J. 西島三重子、谷山浩子
火・ポ・ポ・ポ・ポ・ポ・ポ

花時計



大切な発言

このたびの総選挙は、自民党が敗れて幕切れとなった。兵庫一区でも、元文部大臣砂田重民氏が次点で落ちるという予想外の結果になり、全国的な話題になった。

結局、増税と雨がたた

D.J. 八木誠
水曜スペシャル
木・ポピュラー電話リクエスト
D.J. 木元英治、森山かずみ
金・大久保玲の歌謡電リクまつし
ぐら

D.J. 大久保玲、小松廣代
★未知への挑戦シリーズ
月金 8:30 9:00
★ジャズ・タイム・ナイン
月金 9:00 10:00

★ブータンの全貌を展覧
「知られざる国」ブータンの写真と民芸展が、11月7日から一週間、異人館「ライインの館」で開かれる。主催するのはブータン在住11年の西岡里子さん。ご主人の京治さんは在住16年で、2人で「神秘の王国」ブータンに「日本のふるさと」を見た夫と妻11年の記録」を学習研究社から刊行。

ったのだといわれているが、実はもう一つの原因がある。選挙前にマスコミを賑わした鉄建公団の汚職である。そして、それから続々と汚職や類似した事件が毎日のように報道されるのである。その様子が従来の汚職とは違う。

一口でいえば、「組織汚職」なのだ。三人や四人の不心得者が、私腹を肥やすというのではなく、総がかりの汚職なのである。中央の官庁がそうであれば、地方はどうなの

今回は京治さんが撮影した写真と織物、手工芸品が数多く展覧される予定だ。

★お帰り「奎二&和子」

神戸市文化奨励賞を受賞後、西独デュッセルドルフ



植松夫妻

で活発に作品製作発表を続ける現代美術の植松奎二さん

んが和子夫人共々9月28日2年ぶりに元気に帰国した10月16日からギャラリー16(京都)11月25日から「今日の作家展」(横浜)と展覧会の企画もあり、2カ月間の滞在中も多忙を極めそう。

だろうと思わない者はいないだろう。

ポートピア'81の小林公平プロデューサーが、文化人の意見を聞く会があったとき、画家の中西勝氏が開口一番、「博覧会での汚職はいかん」と発言した。一瞬、わが耳を疑ったが、今にして思えば貴重な発言であったと思う。神戸のあすへの百年にふさわしい博覧会であって欲しい。そのためには絶対に後めたさや影が残ることは許されないことだ。

△Y▽

●KOBÉ POST

★元町画廊(佐藤慶)の60周年企画最後を飾って具象五人展(中西勝、鴨居玲、西村功、松本宏、河野通紀)が、十一月六日・十五日迄開かれます。もう十回記念、力作をご覧ください。

★鴨居玲素描集が、神戸新聞出版センターより千部限定(一万三千月)で十月二十六日・三十一日迄、こうで開かれる素描展に合せて出版されます。

★本誌でおなじみの石坂春生画伯の個展が神戸大丸四階美術画廊で11月8日・1週間開かれます。

★女流邦舞家の花柳芳一師が、十月二十三日東京国立小劇場で、文化庁芸術祭参加の「芳一の会」を開かれ至芸を披露。神戸から三度目の参加です。

★柴田商事の柴田啓嗣さんは新婚ハッピー。スウィートホームが夙川に。〒652西宮市霞町三二五夙川アペロン60室(〇七九八)三六一五三〇一です。

★ニットの「ぎやるそんぬ」(前川オナー、ローズガーデン2F)の本社が移転しました。〒650生田区花隈町45・10 室(三八二)〇二一四

★十一月二十七日に「小原」(生田区中山手通一丁目91・88室(三三三)一〇七小椋麻美)が五周年を迎え、生田神社会館で五周年記念パーティが開かれます。

★邦舞の松本尚蔭さんが十月二十四日大阪能楽会館で、大阪文化祭参加のリサイタルを開き地歌「貴船」「別世界」を舞われました。

★神戸子編纂部の釜須仁美さんが、足立百尋さんと十一月四日玉姫殿で結婚されます。おめでとう。新住所は須磨区高尾台二丁目五十一・一四七三三・一四七三三

★現代美術の今井祝雄夫人、今井美紗さんが、異色の子供生活誌「ボク」が生きている現場」をナツメ社から出版。カメラ大島洋。Y980



真夜中を過ぎた頃、東の空にボンと赤く土星が見える季節、山は紅葉、街には足下に枯葉が舞う季節。
お酒が一段とおいしくなるころ、土星のリングがまた増えた。一体何んて出来、どうして出来たのだろう？

不思議な世の中に、不思議な人間、そして不思議な酒とくればもう宇宙は爆発しそう。

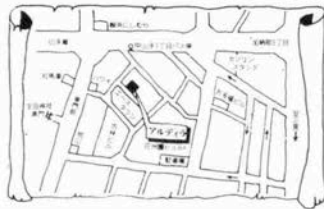
どうして？ それから？ 誰が？ 一切のせんさくを止めて飲もうては。

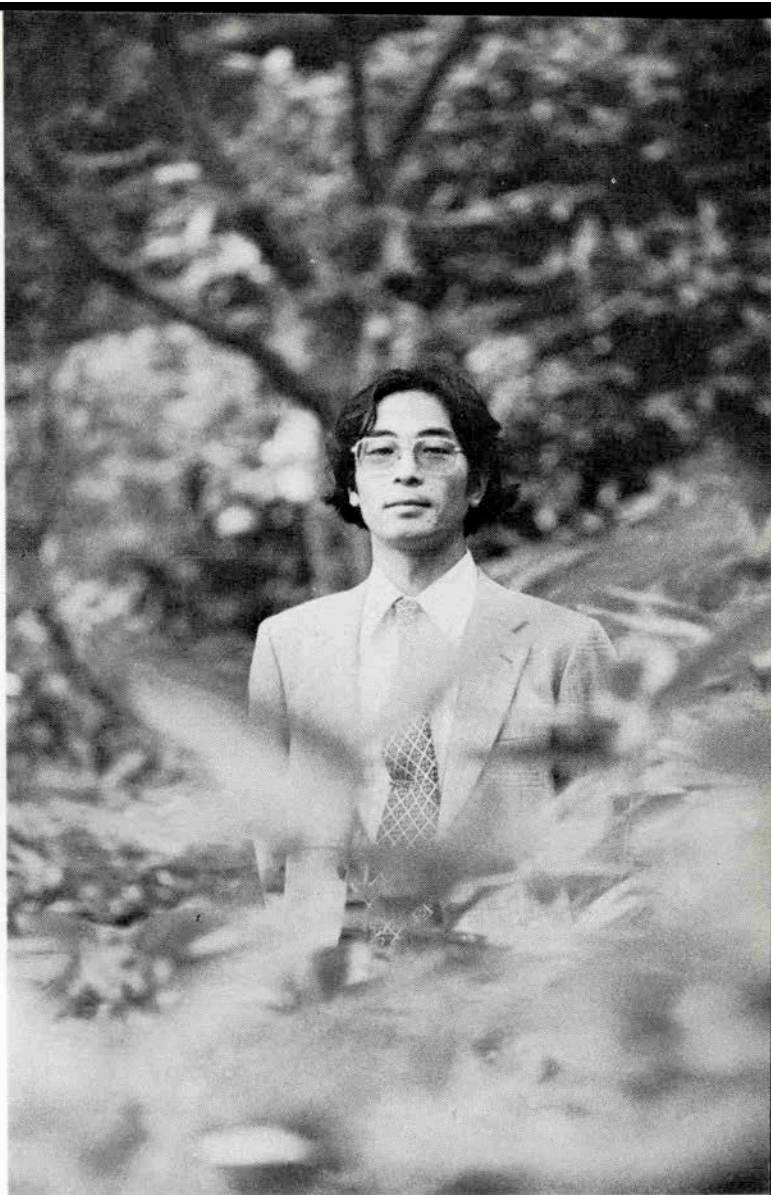
そんな店「アルディラ」。気軽なお値段と雰囲気が自慢です。これが私達の夢。

是非一度理屈抜きておいて下さいませ。待ってます。待ってます。待ってます。



神戸市生田区中山手通1丁目84
(花州園ビルBF)
TEL 332-2855〈年内無休〉





瑞宝寺跡公園にて

ルポルタージュ

●知らない人の神戸 / 5

有馬から

蒼 竜 一

カメラ／緒方しげを

毎朝配達されてくる新聞を、表から頁を捲^めっていく人と、裏からめくっていくのと二通りの人間が居る。それを、政治に関心があるか、スポーツに興味を持つかの違いだと、簡単に割り切ってしまう愚をおかしてはならない。いつの日か、私は裏から頁を捲^めって行くようになる。

た。が、依然としてスポーツには、余り関心がない。どちらかと言えばまだしも、私の関心は第一面の方にあるのに、やはり裏から見に行っている自分に気付く。恐らく、それは、人間の体質、その人の生き方に深く関わることなのであろう。

同じように、人の自然への関わり方には二つある。一つは自然を見下ろしていいないと何となく落ち着かないタイプ。自然がどうなっているのか隅まで把握し、その中における自分の位置を確認することで心は平衡を保ち安心しておれる。ここでは自然は明確な対象として、見透かされている。

それに反して、自然の靈氣を呼吸することに大きな楽しみを見出す姿がある。ここでは自然は人間の量りしれぬ神秘な存在としてある。

私は三年半余り、だだっ広い世界にばかり生きて、帰って来た時、胸を圧する何とも言えぬ息苦しさで悩まされてならなかった。それを私は、自分の視線が山にぶつかる所為だと考えていた。今、思うと、それは自然を見下し、客体として強引に捉え、自分の理解の範疇に閉じこめて来た報いであつたのかもしれない。しかし、隅から隅まで遙かに大地を見通しながら、トラックターで地表を耕している時に、一体、どんな自然の靈氣を感じることが出来たであろう。一つの自然との接し方が不可能なとき、私が日本の自然から復讐を受けたとしても、それは必然であつたのかもしれない。

おそらくあの時期なら、私は有馬の佳さが理解できなかったであろう。有馬と私は全く異質なものとしてその両極に在つたのだから――。

燃えるが如き紅葉で身も心も染めぬかれる有馬の秋もそぼ降る雨に白い花卉の舞う桜の春も、山が薄衣を被つて凝然と凍てつく月光に身を縮めている冬も、私の心にどんな安らぎを与えることが出来たであろうか。しかし今、私には有馬の佳さが分るのだ。私の身に沁み透るように、滝川の清流は流れ、色づき始めた木々の葉は、高く澄んだ空を背景に余りにも美し過ぎる。

冷涼な秋を吸い込んで街を歩いていると、人は日頃考えぬ他人のことにまで神経をやる、優しいところになって来る。

有馬は、狭隘の地である。

乳房に似た母なる山懷に深く抱かれて、温泉郷は在る。山狭をY字型に合流して流れる溪流のふちに、木造の昔ながらの宿屋があり、近代的なホテルの威容があり、木立ちに隠れて保養所があり、寺院がある。

人はよく有馬を京阪神の奥座敷と呼ぶ。しかし、奥座敷と言うには有馬は余りにも自然と融和し、四季折々の自然の移ろいを映して、息づいている。

有馬を真に味わうには、自然がこの山峡において為すその襞に、素直に抱かれてあれ、自ら自然そのものの靈妙な氣に己を捨ててゐることであろう。自然の息吹を、自らのものとして、はじめて散策も、“をんせん”も本来の意味を取り戻すというものである。

をんせん街の南東の外れで六甲川に懸る橋の袂に、“左宝塚右をんせん”の文字が読める荒削りの石碑が立っている。大阪方面から、かつて人々はこの道を通つてこの街に入った。杖をついて、六甲川を“をんせん”の側に渡つた人々は、何日か後には元氣になり、橋を渡る時に不要になつた杖を捨てて歸つて行つた。人よんで、杖捨橋という。誰がつけたか、この橋こそ、をんせんの本来の意味を表わして、大変象徴的な名前である。

北陸の温泉などと違つて所謂夜の遊びの方には全く縁のないをんせんなればこそ、昨今の温泉というものの持つイメージを塗り変えて、有馬はその独自性を保つ必要がある。百人居ても、完全な健康体を搜すのが難しいような現代人を前にして、これ迄の温泉は、少し怠慢に失した傾向がありはしないだろうか。

企業の慰安旅行の団体がやって来て、夕食を兼ねた宴会が済むと、肝心の風呂もそこそこに麻雀が始まる。夜遅くまで牌をかきまわして、翌朝その手で、充血した眼をこすりながらバスに乗り、「なんや、有馬ってなんにもあらへんやんけ」と、そそくさと歸つて行く。彼等を、そのまま帰らせてよいものだろうか。旅館の方は旅館の方で、そのような客に慣れてしまつてゐるものだ

から、たまに二日続いて泊る客が来たりすると、献立変えんならんと変なところで驚いたりもするそう。

もともと有馬は歴史的に、湯治のための温泉で、今を去る奈良に大仏が建立されている頃、僧行基が一寺三院、即ち温泉寺、施薬院、藍若院、菩提院を建て、病人を収容したと言われている。行基は天平年間、伊丹に布施屋（施療所）を設けたとも言われているし、摂津に於ける行基の幅広いセツルメント活動にとつてこの有馬は絶好の場所であったと思われる。海よりも辛い有馬の強食塩泉は、胃腸病・婦人病・神経痛によく、ラジウム泉は呼吸器に、炭酸泉は皮膚病・心臓病によく効く。日本最古ということも然る事ながら、有馬には日本一が多い。塩素イオンからカリウム、セシウム、ルビジウム……その他の含有量において群を抜いている良泉である。ために鎌倉時代には仁西上人が薬師を守る十二神将になぞらえて、十二の坊舎を建てた。その名残りは今も旅館の名に「坊」という字が多いので知られる。また、豊臣秀吉との関りは、千利休などと茶会を開いた時の茶釜が善福寺に宝物として残っているし、念仏寺の石垣は秀吉公別館の跡と伝えられている。今も豊公を偲ぶ大茶会が十一月二・三日の両日にわたって瑞宝寺跡、「日暮しの庭」で開かれている。

「有馬千軒」とうたわれた文化文政期について、郷土史家の森博さんの話によると、有馬の人々の暮しは、そのほとんどが筆と籠に依っていたと云うことである。今はもうほとんどなくなつたが、有馬の周辺は竹やぶが実に多かった。そして、狸、鹿など筆の毛にも事欠かなかった。その頃あつた八十軒の旅館も小さいもので、だいたいが二階二間を自炊宿として貸し、下では筆や竹籠の商売をしていると云つたものが殆んどであつたらしい。民芸品としても有名な、有馬人形筆、茶人や生花の先生が得意先だと云う有馬籠として残っている。筆の産地として現在全国生産の九〇%を占め、画筆や化粧筆をアメリカに輸出している安芸の熊野は、その技術が有馬からも

たらされたものらしい。籠の方は別府に技術を輸出されたと云うことである。

この辺りで、有馬のきれいだころの話をしよう。一時は百二十人ほどいた芸者さんは現在総数七十人。二十歳代の人から七十歳の人まで居る。七十と云つても現役で、お化粧をすると途端に見違えるようになる。有馬の芸妓は、三味線は言うに及ばず、長唄小唄から民謡、踊りと文字通りの本格派芸者ばかりである。

いささか格調が高いのである。このきれいだころの元締めである有馬検査の会長を務める森中タキエさんの話を聞こう。彼女の年齢は詳らかにしないが、かくしやうたるもので、小柄な体を和服に包んで、その声には長年鍛えた風霜の響きがある。

「芸者高い高い言うて何言うてまんねん、他人の花は赤い。何やっても好えことあらへん。テレビ見たらあんなんばかりや。ちよつと服着たら好えのに思ふようなもんばかりや。芸者は、シャツポ（鬘）一つでも二十万はするし、裾の長いについたら百万はかかってまんねん。それに唄や踊りの月謝も高うりましたし、お師匠さんの発表会などのおつきあいと、本当に芸妓が可哀想や。昔はよろしましたなあ。客も落ち着いてるし、情緒がよみました。夕方など浴衣がけで滝へでも行きまほ言うて、蜚取ったり、河鹿の声を聞きに行ったり、炭酸水飲みに行ったりなあ、粋なお客が多うおましたなあ、そりや、お客さんでも、歌が上手で声にホロホロとなるような人が来はりました。それに、お花も長いしね。今はもう団体さんには幹事がでてから、一席や言うたら二時間や、二時間たつたらお返しでんが、そこをもうちよつと情を持ってやつて欲しい。この頃神戸から、えらいハイカラはんが入ってまんねんて、まるでバアみたいや、コンパニオン云うて。そやけど、有馬の芸者はえろまつせ、夜も夜中もなしに火事や何や云うたらすぐとんで行くし、そなんコンパニオンやヤトナ（雇仲居）がとんで行きまつか」

念のために言っておけば、今でも所謂粋なお客は、月に二、三人はあるらしい。大体、五十歳位の人で、唄がうまく芸達者で、そんな人には反対に芸妓が今日は嬉しくてしようがない、今日の花代こちらの方を持ちますわと言ったとか言わんとか、でも時代はもう、大きく変わってしまったのであろう。ただ言えることは、有馬に来て、四季折々の自然の中を散策しないのは、をんせんに来て湯に入らないで帰るようなものだ。

鼓ヶ滝の水音、焼けるような紅葉を映す滝川の流れには自然を感じる。ナイヤガラの滝や、ブラジルとアルゼンチン、パラグアイの三つの国境にまたがるイグアスの大瀑布を知っているが、それ等より遙かに深く自然を観ずるのは如何してなのだろう。あの深くジャングルのど真中に横たわる大瀑布以上に、公園をわずか百メートル程入ったところにある細い滝の流れが、どれ程か深く心

に親入する自然であるのは、不思議なことだった。最後に脱俗の大人の風貌ある、有馬観光協会専務理事の永岡大純氏の言葉をもってこの項を閉じよう。

「根本としては京阪神の奥座敷と云う性格は変わるまいが、奥座敷と言っても密室めいた遊びをする場所ではなく、もっとオープンなもので、六甲の山を背景にその中で真の清遊のできる場所。温泉と六甲の緑と歴史。家族連れが安心して遊べるのはもちろん、湯治場、慰安旅行、会議から接待まで多様な目的に、もっと気軽に利用して頂きたい」。

ついでに蒼氏の蛇足。先日衆議院の選挙があったが、政府は人が病気をしたら、国民を薬漬けにする前に、せめて一週間でもものんびり温泉に漬けて、杖捨橋で本当に杖の捨てられる世の中にしたいものだ。

(今回は六甲山金山縦走コースより)



私の身に沁み透るように、滝川の清流は流れ、色づき始めた木々の葉は、高く澄んだ空を背景に余りにも美し過ぎる。(鼓ヶ滝からの清流)

施設の月

鄭 承博
絵・吉見敏治



郵便受から朝刊を取り出すと、まっ先に社会面を拡げるのがくせになっていた。今朝も借金を苦にした一家心中の記事が載っている。これを読み終るなりアキはただ啞然としてしまった。

この種の事件は、大抵似通ってはいるが、これはあまりにも自分の過去に生き写しである。両親と二人の男の子が死んで、長女だけが生き残ったあたりも全く同じであった。

洗面を済ませて化粧台へ向った。鏡に写った自分を見つめていると、いやな思い出が逐一蘇ってくる。やっ

小学校を終えて中学校へ上ったばかりの春先であった。ある日まるで深い夢からでも覚めるような思いで気がつくとき、そこは病院のベッドで、周囲には看護婦が何人も立っていた。

「よかったわね。あんたの寢床は空席だったから助ったのよ」

とは言われたが、急に何のことかさっぱりわからない。ガスで一家心中の生き残りであることを知らされたのは、それからかなりの時間が経ってからである。

経営していた小さな鉄工所が破産したことはうすうす

知っていた。債権者や高利貸に責め立てられる父を何度も見かけたことがある。しかし、まさかこんな事態になるとは想像もしていない。当時はまだ、どこかに父も母も弟たちも生きているような思いにかられながら、病院からそのまま、施設へ引き取られて行った。

それでもまだ信じられない。そのうちにきつと誰かが助けに来てくれる。そんな思いを抱き続けながら二年が過ぎた秋口である。夜半にふっと目が覚めたので庭へ出てみた。ちょうど満月が頭上へ来ている。アキの家も神戸の和田岬で、二階のベランダから近くの海上に浮ぶこんな月をよく眺めた。以来、一度も戻っていない。近所で一緒に遊んだ友だちの顔が浮んでくる。死んだはずの両親や弟たちも、空中から手招きをするような錯覚に陥った。郊外とはいえ、ここも神戸の圏内である。歩いてでも行けないことはない。みなが寝静まっているのを幸いに、とうとう支度を整えて施設を抜け出した。

車が難路する道路をひたすら歩いて、和田岬へ辿り着いたのは夕刻に近い頃である。町内へ入るなり、そこらの路地から、今にも弟たちが自分を呼びながら走り出してくるような思いであった。ところが、住んでいた家はきれいに取り壊わされている。背の高い雑草の生い茂った空地になって、形の崩れかかった廃車が一台捨てられていた。

すぐ近くに幼稚園から小学校まで一緒だった友だちの家がある。よく遊びにも行っていたので家族の顔もはっきり覚えていた。開け放された玄関を覗くと、おばさんが立っている。急に噴き出してくる涙を堪えながら「おばちゃん、うち、そこにいたアキよ。おなか空いてんね。何か食べさせて」

というのがやつとであった。そのまま土間へうずくま

ってから間もなくである。
「あら、そうか、あんた逃げて来たのね。困るわ。うちの娘はこんど高校よ。受験勉強もあるし、いまピアノの稽古に行ってるの。さあ、これ上げるから早く帰ってよ」

その直後、足下へ百円玉が二つ三つばらばらと転がった。こんどは大声を立てながら奥にいたおじさんが飛び出してくる。

「あかんやんか、そんな者に金をやったら。くせになつて何べんでも来るぞ。警察を呼んで引き渡せ」

と怒鳴った。気がつく、表にもいっぱい人がたつてくる。もう金など拾い上げる暇はない。そのまま立ち上って、無理やりつかみかかる大人たちの腕を振り切るなり、わんわんと泣きながら、一目散に町筋をただ走った。

それからは何処をどうさ迷い歩いたのかははっきりしない。ともかく日が暮れて間もなくである。車のライトと町の明りを避けて、湾岸へ出てきた。大きな建物の影になった暗がりへ座り込むと、そこは突堤の入口で、海からの風も吹いてくる。ビルの壁に凭れて、昨夜来歩き続けた両足を伸ばした。眠気に誘われてとうとうとしていたときである。すぐ近くで吹き鳴らす笛の音に驚いた。見回すと前の通りに夜鳴きのラーメン屋が来ている。いつの間にか客も数人来ていて、みながどんぶりから、大つかみにすくい上げてはすすっていた。屋台からは湯気もむんむんと立ち上がる。これを見ているうちに、空腹感が全身をしめつけてきた。ついには気も狂いそうになつてくる。ちやうど客の切れ目を幸いに、意を決して立ち上った。

ひよろひよろと洗物をしているラーメン屋に近づいて「おじさん、お金がないんね。一っぱい食べさせてよ。そのかわりお仕事手伝うわ。食器洗いならうち馴れてんね」

「ほう、お前、歳いくつや」

「もうすぐ十七やね」

と答えて間もなくであった。手を拭いて屋台から出てきたラーメン屋が、突然両肩を抱きしめて何処かへ連れてゆく。暗い石段を降りて、そこらに群がる鯨へ飛び乗った。

「おとなしく、言うことを聞いたら、ちゃんとお金も上げるがな」

にエンジンをかけて男が待っている。助手席へ乗った。「何処まで行くのよ。おつき合いは明日の夕刻までよ。約束は守ってね」

「恐いよ、恐いよ、放してよ」

「わかつとる」

と懸命に喚いてはみたものの、疲労と飢え切った体からは、何ほどの力も出ない。そのまま、大男の鋼鉄のような腕つぶしに抱き込まれて、気がついたときは、もはや深い深い暗黒の船底であつた。

それ以来ホステスになつてもう十余年、いまでも三宮界限で、バーやキャバレーを転々としている。何かの鬱憤を晴らすには死ぬにも死に切れない。そんな思いを燃やし続けながら生きてきた。この新聞にも長女が一人生き残っている。アキはこの娘もきつと、自分と同じ道を辿る気がしてならなかつた。

駐車場を出るとすぐ、高速へ乗って東へ向つた。乱暴な運転である。深夜とはいえ、前方の車を次から次へと追い越して、エンジンも異様な唸りを立てていた。名神の豊中から、こんどは大阪の市内へ入る高速に移る。あつと言ふ間にそれも通過して、堺のインターから一般道路へ降りた。そのまま南へ向つている。国道筋には深夜営業のドライブインもあれば、モーターのネオンも輝いていた。どんどん素通りをして立ち寄る気配がない。一泊旅行を名目にする大抵の男たちは、国道へ出るや否や、ホテルかモーター、そこらへ駆け込むのが普通である。このたびは何か思わくが違つた。

「ねえ、いつまで走るのよ。うち、もう疲れたわ」

「心配せんでも、寝とつたらいいね」

それからというものは何を言つても取り合わない。わざと色っぽい話も持ちかけてはみたが、全くの空振りで、とうとう根負けをしてしまった。

アキのいまの勤務先は、ホステスが四、五人の小さなバーである。タクシーがなかなか拾えなかつたので、少し遅れて店へ入つた。客が一人来ている。テーブルの上には札束が置かれていた。これを取り巻いてみながワイワイやっている。変な客もいるものだと思ひながらアキも席へ着いた。

かなり禿げ上つてはいるが、まだ中年男である。両手をもじもじさせては終始にやにやにしていた。お愛想のつもりで

「このお金どうしたのよ」

と尋ねると、誰でもいいからこれで一泊の旅行につき合えという。札はしめて十万円だと念を押していた。

金は欲しくても、こうも剥き出しにされたのでは、おいそれと手が出ない。ホステスたちはただ、互に視線だけをちらつかせている。アキは容赦なく、これをつかみ上げて、自分の懐中へ入れるなり

うとうとしてから気がつくと、夜がすっかり明けている。道路標識も和歌山が過ぎて、海南市へ近づいていた。暗いうちは気づかなかつたが、男の顔色が蒼白に変つていく。運転中とはいえ、目付も恐いほど座っていた。一体何者だろう。何かを企んでいるのか、それとも精神異常者か、ただひたすらに、早朝の町を走り抜けて、信号無視もしばしばであつた。

「わたしがつき合つてあげるわよ」

と言つたが、別に口出しをする者もなく、それっきり静まつてしまった。

長い坂を登り切ると、大きな朝日が昇ってくる。次の町へ入つたときは、もう道路が混雑してきた。前方には車が並び、対向車も列をなしている。交差点で止まるたびにアキは、車から飛び降りたい気持ちにさえなつてきた。「ねえ、あんた、いい加減にしてよ。こんなおつき合ひかなわんわ」

店が引けたので、約束の駐車場へ行くと、ライトバン

「もうすぐ、素晴らしい景色が見えてくる。広びろとし

た海に、きれいな海岸、特にいまの秋口は、見晴らしのいいときだ」

「なんやあんだ。女を買うて、景色みんな来たんかいな」

「一度でいいから、君のような美人を乗せて、この海岸を走って見たかったからよ」
「それならそれと、最初からいえばいいのよ。居眠りなんかしないで、サービスして上げたのに。いくら水商売ではあっても客の金をただでは取らないものよ。これをおたしら、三宮気質というの。どう、煙草でもつけて上げようか」

しかし男は首を振った。顔色は相変らず蒼ざめて、目付も一向にゆるめない。なるほど海が見えてくる。長い海岸線も一望であった。

小さな漁村を過ぎて間もなく、前方に車の渋滞が出来ている。事故があったらしい。トラックの積荷らしい物が散乱して、パトカーに救急車、多勢の警官たちで賑わっていた。車を除行させながら男は、どこからか取り出したサングラスを大急ぎでかける。どうやら警官に顔を見られたくないらしい。その慌て振りも順当ではなかった。これは何かの犯罪者に間違いない。逃走のカムフラージュには、よく女が使われる。小説やテレビでは見てきたが、まさか自分が利用される羽目に陥るとは夢にも思わなかった。

現場が遠ざかって、男はサングラスを離さない。初秋の風は車内へいっぱい吹き込んでくる。アキもかつては、犯罪者になりたいと思ひ詰めたこともあった。世の中に恨みをもつ者にとっては、一番ふさわし



い生き方だからである。とうとう実現は出来なかった。いまでも自分の臍甲斐なさに、ときどき愛想をつかすこともある。

それにしてもこの男は何をしたのだろう。殺人か強盗、麻薬に暴行、外見だけでは判断がつかない。それよりもアキは、強張り切った彼の表情を、少しでもときほぐしてみたかった。

「ねえ、そこにドライブインが見えているわ。海辺の高台できれいなとこや。あんたの好きな景色でも眺めて、お食事しようよ」

といって凭れかかったが、男は体まで硬直している。こんどは肩へ抱きすがった。

「うちおなか空いたわ。そうしようよ。ねえ、ねえ……」顔を上げて何度かゆさぶり続けると、やっと頷いて車を寄せる。駐車場へ入って降り立ったが、神戸から乗りづめの足も腰も、ひりひりとしびれていた。

店内に客はまばらである。隅この席を選んだ。壁面は総ガラス張りで、熊野灘が一望である。男もサンングラスを取って、じっと外を眺めていた。

「ねえ、外ばかり見ないで、こちらも向いてよ。わたしつまらないわ。運転中はお酒を飲めないのが残念ね。店のなら、思い切り酔いつぶすんだけど。あんた、おうちは何処よ。押しかけていかなから教えて。どうせ奥さんもお子さんもいるんでしょ。ねえ何か話してよ。それとも、やすやす身分を明かせないわけでもあるの。わたしだってこの道のベテランよ。何を聞いたって驚かないわ。水商売の女だと、ばかにしないで。もっと信じよ」

「俺に構うことはないよ。君こそ飲みたけりや、酒でもビールでもどうぞ」

何も聞き出せない。アキはひどくブライドを傷つけられた気分にもなってきた。これまではそういう堅物でも解きはぐしている。この男だけは箸にも棒にもかからない。運ばれてきたかんたんな食事を済ませて、自分は

何のために乗せられてゆくのかはつきりしないまま、また車へ乗り込んだ。

それから間もなく町外れへ差しかった。海辺りの小さな空地へ車を止める。

「君、おかげで、生れて初めての晴れをさせてもらった。ここがおいらの古里だ」

「だって車は神戸ナンバーやないの」

「生れたというだけで、子供のときの神戸っ子。すぐそこに紀勢線の駅があるね。もうすぐ大阪行きが入るわ。すまんが君、それに乗ってよ」

アキは啞然としながらドアを開けて降り立つと、男はフルスピードで走り去る。みるみるうちに、町を通過して、海岸線を疾走していた。

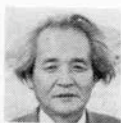
列車を乗りついで、夕刻、神戸へ戻ったが、その翌日である。アキはいつものように郵便受から朝刊を取り出した。今日も社会面を拡げると、小さな見出しで不思議な記事が載っている。

破産した自殺男、釣り人に助けられる！

ぎよつとしながら読んでみた。昨日の男に間違いない。場所も時間も別れた直後である。乗ったまま海へ飛び込んだ車もライトバン、アキは思わず溜息をついた。

立ち上って窓を開けると、神戸港には碇泊中の巨船群、道路という道路は車で埋まっている。たしかに豊かな時代だ。しかし、交通事故に破産、果てしなく不幸も産み出している。自分も最悪のくじを引いてしまった。ところが同じ運命の者が日増しに増えることも事実である。この実情をしっかり見届けて、あの世の家族へ報告をするのが、生き残った自分の義務にも思えてならなかった。

□筆者紹介／鄭 承博



鄭さんの作品の底には、常に「弱者」を見つめる眼がある。下積みの人間や浮がばれない人間の訴え、歌声を、一貫して作品化している。「施設の月」は、その基礎ともいえるべき作品である。昭和47年、「裸の捕虜」で日本農民文学賞を受賞後、身体をこわし、長らく執筆を中断していたが、3年程前から再開、これからの頭振りが期待される。昭和48年ブルーメール賞(文学部門)受賞。洲本市在住。56歳。